岩槻の銀行建築「大正館」について

K03072 佐藤 仁美

1. はじめに

1-1 研究背景と目的

岩槻城の城下町であり、宿場町として、古くからの建築をたくさん所有するさいたま市岩槻区は、かつてから埼玉の政治・経済の拠点の一つであり、文化財、歴史的遺産がたくさんある。

写真 1 大正館（改修前）

本研究の対象である大正館は、竣工当初から昭和 35 年まで銀行として使われており、当時の銀行建築を伝えている数少ない建築である。また、平成 18 年に改修され、洋館を建築する際の試行錯誤をみることができる。以上より、研究をするのに貴重な建築であると考えられる。

大正館の平面構成、歴史を研究することで、銀行建築としての大正館がどのような特徴をもち、施工の際にどのような試みがなされたのか、どのような役割を持つのかを明確にすることを目的とする。

1-2 研究方法

①大正館、並びに、当時の岩槻区についての資料を収集する。

②大正館と比較することを念頭に置き、銀行建築について調べる。

③銀行建築としての大正館、大正館の歴史、岩槻区での大正館の位置づけについてまとめる。

2. 銀行建築について

対象：明治初期から昭和初期

2-1 室構成・配置

銀行の各室を、二つに分類することができる。直接顧客に接し交渉する場所である接客部門と、主に業務管理を行う場所である非接客部門である。具体的に、接客部門は銀行室・応接室などが、非接客部門では、金庫室・支店長室・更衣室・会議室などが挙げられる。

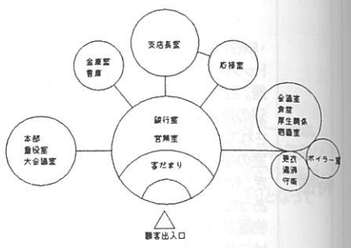

図 1 銀行内部ゾーニング

銀行の規模により室の種類は増えていくが、基本的に配置は同じである。

中央に銀行室、奥に金庫室や応接室を、それ以外の室も銀行室に出入りしやすい配置になっており、銀行室を重視した構成になっている。

2-2 平面構成

銀行室の平面構成は、図２の７タイプに分けることができる。

表１は、図２を元に銀行の規模・年代で、平面構成を分類したものである。

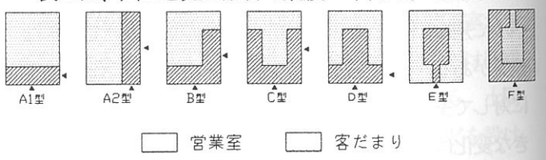

図 2 銀行平面構成

表 1 平面による類型分類

面積	型	明治初期	明治中期～後期	大正	昭和初期
1000㎡位以上	複合		横浜正金銀行		三井本館
1000㎡～200㎡位	A	神戸三井組	日本銀行門司西部支部	河合銀行神明町支店 第百十三銀行	横浜正金銀行東京支店
	B			日本信託銀行 森村銀行 山口銀行東京支店 三菱銀行本店	
	その他	第一国立銀行 駿河町三井組	中越銀行		
200㎡位未満	A		東京銀行	村井銀行京都支店	
	B		第一銀行京都支店 東海銀行 第一銀行横浜支店 第一銀行新大阪町支店	清池銀行 村井銀行本店	

初期の銀行建築の中には図２の平面構成にあてはまらないものもあるが、それ以外では年代による平面構成の変化が見られなかった。銀行建築の平面構成が初期の段階で、決定付けられたということだと考えられる。

しかし、銀行の規模による平面構成の変化が見られた。大規模の銀行では複合型、中小規模の銀行建築では A1 型，A2 型，B 型が良く使われる平面のタイプであることがみてとれる。A1 型，A2 型，B 型は、中小規模の銀行建築でも効率良く業務を執り行えるプランであることから、当時から銀行建築には業務の便宜性が求められていたことがわかる。

2-3 立面構成

表 2 立面による類型分類

表２は、建築面積 200 ㎡未満の登録文化財の銀行建築を、年代ごとに立面構成で分けたものである。

大正時代の立面構成をみると、中央入口型（三分割型）の構成が多いことがわかる。横出入口型は角地の場合に用いられることが多いため、数が少ないと考えられる。

2-4 銀行建築様式の歴史

明治の初めの銀行建築は、西洋建築の模倣と日本建築の技術を合わせた、日本の西洋建築という様相であった。明治の後半からは、世界の流行から日本でも、ギリシャ寝殿造りがよく使われるようになっていった。

しかし、日本での西洋化が地方へと展開していくにつれ、古い伝統的な町並みと銀行建築との調和と中小規模の銀行に適したデザインを求めるために、各地で新たな試みがなされるようになり、ギリシャ風建築とは違う形式の銀行建築が造られるようになっていったのである。

大正時代では、欧米から入ってきたアールヌーボーを基調としたものや、ドイツの質実剛健な銀行建築が建てられるようになった。

2-5 岩槻区の銀行の歴史

岩槻区は商業の中心地であったため、資金供給のため早くから銀行の設置が求められていた。明治初期、両替商の中井新左衛門商店が進出し、明治 16 年に中井銀行に改組したのが、岩槻区に最初に設立された銀行となった。その後、明治貯蓄銀行岩槻支店が市宿通りに設立され、現岩槻区に銀行が根付いていった。

3. 大正館の概要

3-1 大正館の建築

竣工：大正末期

設計者：不詳

構造：躯体 煉瓦造
二階建て
屋根 トラス木造
瓦葺

建築面積：128.3 ㎡

延床面積：238.6 ㎡

敷地面積 約970 ㎡（300 坪）

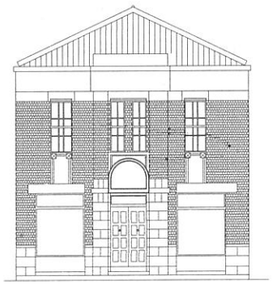

図 3 大正館立面図(改修後)

煉瓦とコンクリートで外装を施してある。窓は縦長で上下に開く形式のものが使われている。そして、正面の立面構成が三分割で中央に入口が設けられている形式である。これは、「大正館」が大正時代の銀行建築の典型的な意匠をもっているということである。

また、内観では、一階に二本の柱があることと小屋組がトラスで構成されていることが印象的である。そして、開口部の装飾などは、いたってシンプルなつくりになっている。

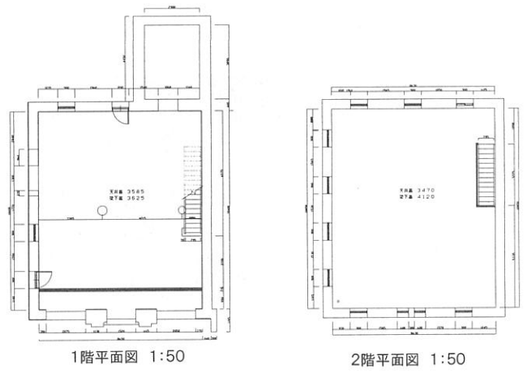

図 4 大正館平面図(改修前)

2-2 で述べたことから、銀行として営業していた当時の平面構成はA1 型, A2 型及びB型であったことがいえる。入口の配置関係から、A1 型であった可能性が高いといえる。また、一階を銀行室として使用し、二階に事務室などを配置していたと考えられる。

3-2 大正館の歴史

2-5 に書いた中井銀行が現在の岩槻区に建設したのが、大正館である。その後も、中井銀行として経営するが、昭和２年に昭和銀行と合併、昭和 21 年に安田銀行に合併、

指導教員 伊藤 洋子 教授

そして、昭和27年に富士銀行と改名した。

昭和35年戸塚巌氏が譲り受け、補修工事を行った後、現在人形店として営業している。

3-3　大正館の立地

図5は明治35年当時に大正館があった場所周辺の商店街の地図を復元したものである。調査の結果、江戸時代から栄えていた市宿通りと、そこからのびる久保宿通りが岩槻における重要な通りであることがわかった。

図5　明治35年商店街

また、市宿・久保宿通りから東南に延びる道が横町林道通りであり、商店街として明治35年以前から人々の生活に関わっていた道である。

大正館のある場所は、住民がよく使う道路の交差点付近であった。銀行は市民の生活に関わるものであり、交通が便利である必要があったと考えられる。

4.「大正館」改修工事

4-1　改修作業

近年、大正館は老朽化し、平成18年に改修工事が行われている。大正館が銀行であったころは、大正館の裏に二階建ての用務員宿舎とトイレがあり、また、細長の土地は表通りから裏通りに抜けることができるようになっていたという。人形屋として使われていたときには、一階を店舗として、二階を倉庫として使っていた。南隣の鉄骨造の店舗と通路でつなげられていた。また、改修以前は、大正館の正面壁面には、レンガの上にさらに外装され、ビルのような様相であった。南隣の鉄骨造の建物を解体撤去し、後付けの外壁をはがし、大正館の改修工事が始められた。

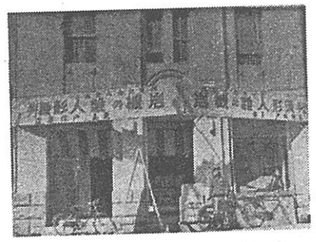

写真2　大正館（人形店当初）

4-2　意匠・施工

改修工事を行うことで、大正館に、細かな意匠が施されていること、また、当時施工に関わった人の工夫を見て取ることができる。以下、個別に述べる。

4-2-1　壁面（タイル、煉瓦）

改修当初、外壁のタイルには漏水予防と撥水効果のために白いペンキのようなものが塗りつけられており、室内には、小屋組の煉瓦もヒビが入っており雨漏りしていたために白華現象が起こっていた。白いペンキのようなものは、煉瓦内部に雨水が浸み込まないためのものとして塗りつけられたようであり、薬剤では落ちなかったため手作業で削り落とし、白華現象が起こっていた小屋組部分のレンガも改修された。

大正館の外壁タイルの特徴として、エッジがある。現在使われるタイルの大半はエッジが丸く作られているが、当時のタイルはとがっていたという。これは、小さな違いであるが、外観の意匠に大きな影響を与えている。とがっているタイルは、日光に当たった際、陰影がはっきりと出るためタイルがまっすぐに並べられてないと美しくない。当時の左官に求められた技術が高かったことを物語っている。

エントランス部の壁などには、通常は人研ぎで作業されるところに、洗い出しが用いられている。

4-2-2　建具

改修時、銀行当時のドアがなかったため、現存する他の洋館の写真を元にデザインし、作成することになった。当時のドアに近づけるために、決りだしを使い、木材も用途によりヒバや檜を使いわけした。

また、窓上部の錆び付きによってシャッターが動かず、ワイヤーの故障によって窓の開閉ができない状態であった。修理をするときに、シャッターは取り外し、ワイヤーで開閉していたものを、金具を用い電車窓のように開け閉めできるように改善した。

窓の金具には、真鋳が使われていることや、雨じまいに特徴が見られたという。窓は上下に上げ下げする形式であるのだが、上下の窓のサイズが異なるにもかかわらず、重量のバランスが取れるように造られており、さらに、図6のように窓と窓がかみ合うように傾斜を設け、風が下から吹き上げても、上から吹き込んでも雨水が内側に入らないように工夫がなされていた。

図6　窓モデル図

5. 大正館の復元

大正館の3次元パースを、図7、図8に示す。

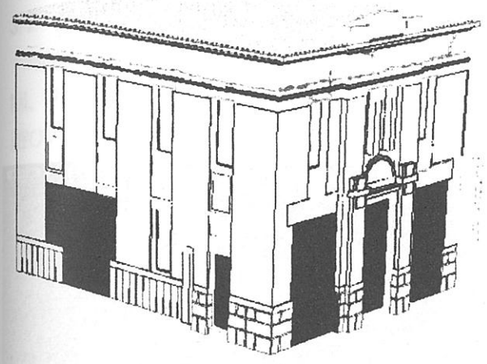

図7　大正館三次元パース（改修前）

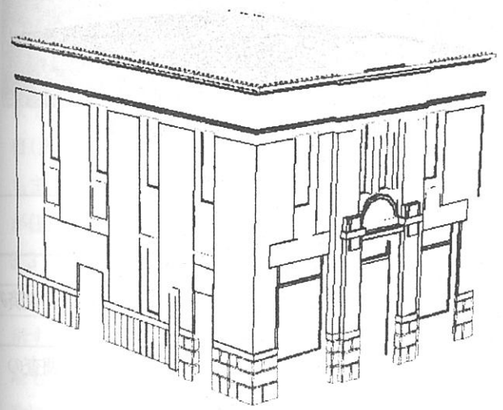

図8　大正館三次元パース（改修後）

一階に高い天井の室と金庫室、二階には小屋組が剥き出しになっている室があり、かつては裏に従業員用の宿舎があったということである。平面構成は、以上の室構成、建築の規模と出入口の配置関係から、図2のA1型、B型であったと考えられる。そして、二階の室の用途によって平面構成がどの型であったのか判断できる。二階が、事務室などの非接客部門を担う室であったならばA1型の可能性が高く、応接室などの接客部門を主とした用途であったならば、必然的に客も階段を使うことになるのでB型の可能性が高くなる。

大正館の二階は、一つの大きな室になっているため、A1型であったと推測される。

立面構成は、三分割にした中央に入口を設けるという中央入口型であり、大正時代に流行した構成を採り入れたと考えられる。この中央入口型は、大正館のように規模の小さな銀行に適した形であったと考えられる。銀行建築は、建築としての美的要素や簡易さよりセキュリティーが求められる。中央入口型の小さな銀行は、中央に入口があることでより見通しが良くなり、防犯度が高まるため、接客カウンターの配置に工夫をされたものと考えられる。

6.　結論

人形店として利用されている大正館の建築は、吸収・合併などが数多くある銀行業界の中で、大正時代の銀行建築を伝える数少ない現存する建築である。そして、当時の建築家の洋館に対する姿勢や取り組みと、大規模の銀行とは異なる地域住民に密着し営業していた地方銀行を知ることができる貴重な存在である。

銀行建築であった大正館の調査を通し、以下の知見を得ることができた。

① 平面構成　A1型, A2型, B型が多い
② 立面構成　中央入口型(三分割)が多い
③ 立地状況　地域の主要道路付近
　　地域の中心に存在している

以上より、地方都市の大正時代の銀行建築の典型であると考えてよい。

また、中央入口型（三分割型）という銀行建築独特の立面構成があること、さらに、銀行が地域の中心に存在していることから、銀行建築が都市の中で重要な存在であったと推測される。

岩槻の大正館も、地元の有力銀行中井銀行として久保宿通りに建設されている。城下町であった岩槻が、近代に入り新たに商業都市に変容している。大正館もその一つの象徴であったと捉えられる。

《参考文献》
「総覧登録有形文化財建造物5000」
　文化庁文化財部著
「建築学大系30　事務所・銀行」
　建築学大系編集委員会編/彰国社/1960
「図面でみる　都市建築の明治」1990
「図面でみる　都市建築の大正」1992
「図面でみる　都市建築の昭和」1998
　鈴木博之・初田亨編/柏書房
「明治・大正・昭和戦前の日本の銀行建築の歩み」
　澤井司郎著/富士精工(株)/1991
「岩槻市史　通史編」
《参考資料》
「現存する全国の主な銀行建築」